

まつやん堀

桜田靖

佐賀県小城市小城町にある今は廃業の料亭松屋の堀のことである。でも町の誰も訛って『まつやん堀』と呼んでいた。ここは中世から城下町として栄えた。遥々と肥沃な米どころの筑紫平野が、衝立のように陰峻な天山山脈に遮られて山を負った平地は水清く城下町に絶好の立地条件だった。源平戦乱の世を鎮めて開府した鎌倉幕府は、覚えめでたい勲功の臣の坂東武者千葉氏をこの地に封じ、肥前の国・今の佐賀、長崎一帯を統治させた。城下町とは、武家や豪商らが茶を嗜むせいで、独自の菓子文化を持つもので、例に漏れずこの地の名物は和菓子の羊羹で、佐賀県の名産品のひとつとして現在に至っている。星移り時代が変って千葉氏が衰退したら、いつか鍋島家の領地、支藩七万石の城下町となり、まつやん堀の近辺には殿様の陣屋が置かれた。この堀は町の中央に位置し、旧藩校跡地の小

学校と桜ヶ丘なる公園山に挟まれ、堀の周囲は四、五百メートルあった。堀というからには、いつの世にか人力で掘ったものだろう。近世以降は、この町の西方の峰山を越えた先の村落のあちこちで、大炭田が次々と発掘されて全国各地から人口が流れ込み、この城下町は遊興の地、料亭・裏町の遊郭街など繁盛を極めた。里の言葉でいう「佐賀さい三里」県庁のある佐賀市の西北十二キロの交通の便の良さもあった。

一 帰郷

山神勉は東京の小さな印刷所一筋に勤めて四十余年、この春に、一年前に通告された六五歳の定年を迎えた。最後の出勤日の朝、しみじみと鏡の中の自分の顔を見た。還暦の頃はまだ髪も多かった気がする。汚れた薄雪みtainな白髪が増えたうえに、目立って髪量の減少を覚えたし、眉毛に交じる白毛に我ながら嫌気がした。まだ禿げていないのがせめてものの救いだ、と気を取り直した。もう社員

の 前 から 消 え 去 っ て 然 る べ き 年 に な っ て し ま
っ た 、 と 納 得 す る し か な い 。 人 生 な ん て あ っ
気 な い も の 、 と い う 月 並 み な 感 慨 し か 湧 か な
か っ た 。 父 母 は と っ く に 黄 泉 に 旅 立 ち 、 永 年
の 連 れ 合 い も 突 然 の 白 血 病 の 発 症 で 昨 年 亡 く
し た 。 郷 里 の 家 は 元 々 借 家 だ っ た し 、 東 京 で
は ず っ と 社 宅 暮 ら し だ っ た 。 郷 里 に 母 方 の 縁
者 が い る に は い た が 、 東 京 に 出 て か ら 何 ら 付
き 合 い も 音 信 も し な か っ た の で 、 す で に あ か
の 他 人 同 然 で 、 今 更 顔 を 出 す 気 は さ ら さ ら な
い 。 遂 に 子 種 に も 恵 ま れ な か っ た し 一 人 っ 子
だ っ た の で 、 仕 事 を 辞 め て み て 他 人 事 の よ う
に 思 っ て い た 天 涯 孤 独 の 悲 哀 が 、 初 め て 傷 口
に 塩 を 擦 り 込 ま れ る ほ ど 心 底 骨 身 に 沁 み た 。
男 児 一 人 、 こ の 地 上 に 棲 家 も な い の か 、 長 い
こ と 掛 け た に し て は 、 雀 の 涙 ほ どの 裁 定 の 年
金 額 に 愕 然 た る 気 色 で 老 後 を 考 え た 。 そ ん な
時 に 竹 馬 の 友 の 顔 が 思 い 浮 か ん だ 。
「 長 年 ご 無 沙 汰 ば か り し て 、 ほ ん に 悪 か っ た
ね え 。 」 と 、 小 学 校 、 中 学 校 、 高 校 と 一 緒 だ っ

た同級生に義理も恥じらいも忘却し、思い切
って連絡した。まつやん堀の近所に住む仲良
しだった北島輝男の幼い顔を瞼の裏に浮かべ
て電話をかけた。
「そうね、あんたも定年かね。同窓会にも全
然帰らんで、元気にしとるね。こっちも羊羹
屋とか写真屋とか、自営しよる者はまだ働き
ようばってん、学校の先生でん市役所でん、
勤めばしよった者はほとんど遊びようよ。忙
しかあて言いよる者も、精々孫の世話ぐらい
で格好つけとうくさ。そいに自営の者も、ほ
んな仕事は子供に継がせて、自分は暇つぶし
の手伝いよ」と彼は三十数年振りの電話にも
気さくに応じてくれた。山神は虫の良さを笑
われるのを覚悟して、北島に間借りの申し出
をした。素面では言えないので、電話する前
にウイスキーをストリートで呷って、若干は
朦朧たる気分だった。北島の家業は土建屋で、
昔から広い屋敷に住んでいたからである。北
島は意外にも喜び、物価の高い東京なんか早

く引き払って帰って来い、庭にある離れを自
由に使ってくれ、と好意を示した。山神が家
賃の心配をしたら、初手からそんなものは当
てにしていけない、それでは気が済まないのな
ら数千円の気持ちだけで十分だ、と言ってく
れた。それなら自分の微々たる年金額で十分
に生活が可能だと山神は心算した。
「キャアツブロの頭に火んちいた！へ火がつ
いた〜」
山神は呟いた。その大きさは鳩くらい、青
黒い羽根の水鳥『かいつぶり』の里訛りであ
る。水鳥が頭に着火したみたい、にタイミン
グ良くプルつと潜水したら、遊び仲間で哄笑し
たものだ。タイミングが悪いと、かいつぶり
は水面に浮かんで澄まし顔、腹立ち紛れに小
石を拾っては投げつけて遊んだ遠い日々を思
い出す。まつやん堀は駐車場設置の埋め立て
で狭くなったようだ。今もキャアツブロは飛
来するといふ。かつての料亭松屋も家屋は残
っていないが、人の気配もない廃屋で、滅びし

ものの荒へすさゝびの有様だ。幼少の頃に、よく遊びに行った北島輝男の家の二階からまっつやん堀の青い水面が一望できたが、今は周辺に家が建て込み全く景色は遮断されてしまった。北島は頭を丸坊主にしていた。髪に格好つけても女にもてる年じやのうな。った。こいが一番サッパリして櫛も要らんし、風呂でザブツとお湯かぶっただけでシャンプーもせんでよか」と達観している様子だった。山神も、そんな北島の格好の方が幼少時の面影が濃くて好ましかった。山神は帰郷した日、に自転車を買った。先ず、生家だった駅の近所の借家を見に行ったが、一面に狭い家屋が押し合って、すでに跡形もなく消滅しており愕然と肩を落とした。それでも氣を取り直し、フナ釣りをした沼やドジョウをすくった小川、竹の子掘りにアケビ採りや目白追いなど、北の山里から南の平野に至るまで、親があきれ

るほど遊び回った田舎の集落を辿ってみた。子供の昔は町の子だけの集団だったら、どこ

からともなく石ころが飛んで来たものだ。自
分のテリトリーを、よそ者がうろつくのは看
過できないに違いない。古今東西、発展途上
地域には、そんな偏狭な排他意識が根付いて
いる。そんな折、田舎の集落の子に追い詰め
られ、窮余の一策で手にした釣用の竹竿を投
げ付け、見事に相手の胸に命中し泣かせて溜
飲をさげた覚えもある。川原の砂場で付近の
集落の子と相撲を取って夕方遅く泥まみれで
帰宅し、こっぴどく母から叱られた記憶が思
い浮かんだ。とにかく故郷はただただ懐かし
く、山里へ野山へと自転車を疾走させては思
い出を反芻した。総じて町の通りに往時の人
の往来の賑わいもない寂寥さに呆れ、山の姿
以外の景色はすっかり変容してしまった、と
おのが身に重ね合わせて落魄の念にかられも
した。
二旧友
季節は初夏の陽気になっていた。出掛けに
北島から、その日は早めに戻るように告げら

れた。山神の帰郷祝いを幼馴染でやってくれ
る段取りになっただけ。小中高と一緒に
馴染みを呼んでくれるという。帰ったら北島
家の座敷に酒盛りの準備が整っていた。卒業
以来始めてという顔はいなかったが、もう何
十年も顔を合わせていない連中だった。皆、
一斉に拍手して歓迎してくれた。「お前、何
年振にかにや？」この地を離れたことがない
農家の島田太郎は里の言葉丸出しだった。深
い皺が刻まれ真っ黒な日焼け顔に、髪が頭頂
部に名残おしそうに乗っかっていた。幼年時
同様の頑丈なつくりで肩幅も広いが、顔は来
し方を刻むものである。
「以前帰ったのは親の葬式の時、もう三十
年以上も経ったよ。しがない印刷所の会計係
で、アツという間に一生が過ぎた感じだね」
と山神はまだ標準語で通した。
「お前、小学生の時分は弱うて、よう、良ん
なか連中からいじめられよったな。オイが助
けてやったことば、忘れとらんよな」と島田

の言う通りだった。山神は里の言葉で『良んなか』といういいじめっ子の数人から、よく校庭の隅っこで取囲まれ、
「おい、お前の父ちゃん、女のするごたあ仕事ばしようにやっか。毎日、何処まで羊羹ば売いに行きようとか」などと嘲られ、子供心に悔しくて泣き顔になったものだ。そんな時、背が高く頑丈な体格の島田が必ずやって来て、「コラッ、何ば言いよつとか！」と拳を振り上げてその連中を追っ払った。そのことは承知し、今でも恩義に感じているので、彼はコクリうなずいて薄笑いを浮かべるしかなかった。山神、故郷に錦を飾ろうなんて昔のことだよ。人生は定年後が黄金時代だよ。前向きに考えてみろよ。この離れに侘び住まいなんて風流だな、洒脱で羨ましい限りだぞ」と四十代の末まで名古屋を中心に自動車のセールスマンをやり、家業の羊羹屋を継ぐために帰つて来たという中島豊一が説法のように言った。

彼だけは、小ざっぱりした柄シャツにループ
タイのお洒落をしていた。子供の時から端
正な顔立ちが変わっていない。
「何ば言いよつとか、中島！オイ達は棺桶に
両足突っ込んで、もう、しゃがんで寝るだけ
くさ。後は三途の川の舟着場から精霊舟に乗
って渡るだけだ」と島田がからかった。
「こんなにご馳走を用意してくれて、俺も会
費を出すよ」と山神は目の前のテンプラ・刺
身、野菜の煮物、漬物などの酒肴に恐縮した。
「何ば言いよつとね！気にすんなよ。酒は酒
屋の鉄っちゃん、オカズは皆がカミサンに作
らせて、そいば持ち寄っただけだよ」と北島
が笑った。
「山神、ほんに久しぶりという奴だな。よう
生きとつたな」
ちよつと苦味のある面相だが、たまに見せ
る笑顔に愛嬌があり、小学校の下級生時から
なぜか気が合つて、よく遊んだ酒屋の内藤鉄
夫が真ん前に座つてお酌をしてくれた。この

メンバーは山神が帰って来るのを待ちきれずに飲み始めていたようで、すでに四人ともほろ酔い気分になっていた。内藤は三十代の末頃まで長崎県警で刑事をやっていたが、交際相手の女と揉めて愛人問題が上司に発覚し、自ら身を引いて生家の酒屋を継いだ、と北島から聞いていた。確かに若い時分は二枚目で女にもてただろうし、今でもイケメンの片鱗は残っていた。三探偵ごっこ酒酔いの回りに連れ、全員大声の早口になった。山神は、清酒のお燗で何度も座敷を出入りする北島の奥さんの仏頂面を伺って、さぞや迷惑しているだろうと思ったが、座が白けるので黙っていた。山神、これから何ばして暮らすとか？と島田が徳利から手酌でコップに清酒を注いで訊いた。さあ、子供もおらんし、親もおらんし、親戚付き合いもないし、友達だけが頼りだよ。

よろしく頼みます。」と山神はひたすら神妙に
低姿勢を貫いていた。
「啄木だよな。“故郷の山はありがたきかな”
と歌ったのは。山ちゃん、天山の姿はなかな
かのもんやろう」と茹蛸へゆでだこゝみたい
に真っ赤な顔をした北島が言った。今度、奥
さんが座敷に入って来たら飲酒ストップのレ
ッドカードが出そうな様子だった。
「それよりか、まつやん掘が懐かしかよ。小
学校の傍やけん、よう遊んだやんね。どこか
の爺さんから子供の頃は、冬には堀が一面に
凍結して、小石ば投げつけ滑らせて遊んだっ
て聞いたよ」と山神もいつの間にか少し方言
に変わっていた。
「俺達も平べったか石ば拾うては放り投げて、
何回水面を出たり入ったりすっか、競争した
やんね」と中島は酔うほどに、返って蒼ざめ
た顔になっていた。
「あん堀は気色の悪かよ。うちの親父が麻雀
の帰りに、酔へえゝいくろうて夜中に歩へさ

るゝきよったら、お前、真っ白か顔の女が、
幽霊のごとぼうっと突っ立って、きやあまぐ
れるへ気絶するゝごたったてよ」と島田が眉
を顰めて怖い顔を作った。
「そいは、いつ頃の話ね」と北島が訊いた。
「うん、小学校の六年生か中学に入りたてや
ったかにや。否へうんにやゝ、もっと以前か
にや。もう、はつきりせんとたい」
「そうすると昭和三十年頃か、それ以前のこ
とだね。俺達は小学五、六年生か、それ以下
だね」と即座に口に出るほど、山神は数字に
強かった。
「公園の便所で真昼間、炭鉱夫と女郎がダイ
ナマイト自殺したとば走って見に行ったよ。
便所の戸板が血でベットイの真っ赤っか、昼
飯の最中にドカーンとももの凄い音がしたんだ。
帰ったら、うちの親父があ肉ば売ったら、
百刃で幾らすつとやろかねって笑うとった
よ」と公園に近い本町に家がある中島が言う
と、山神も、

「俺も裏町の遊郭で、やっぱり炭鉱夫とパン
パン女がダイナマイト心中したのを、近所の
誰かと一緒に行って見たよ。自転車こいで、
すっ疾へとへばして見に行ったら、警官より
も早く着いとったよ。男の毛むくじゃらの腕
やら足やらが、遊郭の庭のあっちこっちに飛
び散っていたのを見ていたよ。すぐに刑事に
怒られて追い出されたけどね」と色街の記憶
を語った。
「うちは酒屋やけん、花見の頃は真夜中でも
酒ば売ってくんしゃいと叩き起こされた覚え
があるよ。夜中には裏道で大人達が、よう喧
嘩しよったよ。女の奪り合いやろかね」と内
藤も静かな口調で思い出を語った。
「オイはよう風呂屋に行つたよ。百姓仕事ば
手伝わされ、泥だらけやけん、銭湯の方が気
持ち良かけんな。龍や虎なんて紋々ば背負っ
た連中が自分の女の股の具合ば口々に自慢し
よったよ。よう締まる巾着のごたあとか、深
か壺のごたあとか、あそこの壁に数の子のご

た あ 粒 々 の あ っ て 塗 へ ぬ っ ず る ご と 擦 へ こ
す っ り 付 け る と 気 持 ち ん 良 か あ と か 、 子 供 で
ん 意 味 の 分 か っ た よ ー と 島 田 は 酒 が 強 く 吸 い
込 み が よ い が 全 く 乱 れ な い 。 皆 、 酔 っ 払 っ て
勝 手 な こ と を 喋 り ま く っ て い た が 、 氣 に な る
こ と が 腹 に あ っ た の で 、 山 神 は 頃 合 い を み て
口 を 差 し 挟 ん だ 。
「 さ っ き の ま つ や ん 堀 に 話 ば 戻 す け ど 、 島 田
君 が よ そ わ し か へ 氣 味 の 悪 い っ 女 の 話 ば し た
ね 。 俺 も 親 父 か ら 聞 い た 話 が あ る よ 。 月 夜 の
晩 に 白 装 束 の 女 が 堀 端 の 道 を 走 っ て 来 た の で 、
ギ ョ ッ と し て 草 の 中 に 避 へ よ っ け た そ う だ よ 。
髪 を 振 り 乱 し 半 狂 乱 だ っ た と 言 っ て た な あ ー
と 山 神 も 徐 々 に 方 言 を 思 い 付 い て は 口 に し た 。
「 い っ 頃 の こ と か ね ？ ー と 元 警 察 官 の 内 藤 鉄
夫 が 興 味 深 い 顔 付 を し た 。
「 小 学 生 の 時 に は 間 違 い な か ね 。 ど こ か の 羊
羹 屋 さ ん の 寄 り 合 い で 酒 を よ ば れ 、 裏 道 の ま
つ や ん 堀 端 を 帰 る 途 中 の こ と だ ろ う ね ー
山 神 は 、 稼 業 が 女 の す る こ と だ 、 と い じ め

られたように、父は羊羹の行商で県内の唐津市や武雄温泉、或いは嬉野温泉や祐徳稲荷で有名な鹿島市の菓子屋を廻っていた。確かに羊羹の行商は、専ら『かつぎ屋さん』と呼ばれる婦人達の生業だった。

「そぎゃん話は結構あると思うよ。オイはまつやん掘のそばに車力のあつて、誰へだい」

か知らんばつてん、親父さんの倒れとんさつたと聞いた気がするなあ」と火事場の野次馬みたいにくすっか顔を火照らせた北島が言った。車力とは、大きな木製の車輪の付いた旧式の荷車の呼び名である。

「まつやん掘の怪談かね。面白かやつか！山神が帰つて来たけん、ちよつと真相ば確かめてみんかね？皆、暇人ばつかしやろう」と酒屋の内藤が元警察官らしい提案をした。

「オイは百姓仕事やけん、暇じゃなかぞ！ワガドンと等しうするな」と島田が、自慢そうに鼻の穴をふくらませて息巻いた。

「島田君、良かやんね。こぎゃんことでもせ

んと、山神が町の衆に溶け込んでいけんよ」
と北島がなだめた。島田は、ちよつと自分の
働き振りを皆の前で威張ってみただけで、他
意はなく、
「すまん、すまん、オイももちろん手伝うよ。
面白かやんね」と薄くなつた髪を掻きあげた。
「昔、ラジオ放送に少年探偵団ってあつたね。
俺達は老年探偵団だね」と山神が言つたら、
「年寄りの冷や水とバカにされんかね」と中
島が心配顔をした。
「よか、よか、誰へだい」が何ば言おうが、
人生、愉快にやるに限るよ」と北島が制した。
「そうだね。たまのゴルフ、後はカラオケ、
テニス。社交ダンスば、すつなんて柄にもな
かし、稲刈りの後の田ん中ゴルフも格好悪か
しね。探偵ゴッコは知的ゲームやけん面白か
ごたあね。やつてみつか」と中島は納得した。
四捜査本部設置
宵も更けていたが、懐かしさで誰もトイレ
を拝借する以外は腰を上げようとせず、話に

夢中になっ
ていた。
「内藤、お前、元警官やけん、任務分担ばし
てくれ。」と島田がやる気を示した。
「うん、俺は確かにこいで警察ば辞めたばっ
てん、刑事の経験もあるけんが任せんね」と
内藤はニツと小指を立てて自嘲的な笑顔を
作ると話を続けた。
「先ずは話の中心のまつやん掘に、犯人へホ
シゝはおらんと思いうばってん、鑑どりばすっ
けんね」
「かんって何ね？」北島が警察用語に顔を顰
めた。
「鑑識の鑑の字くさ。新聞なんかに土地鑑と
か載つとうやろう。土地ば良う知つとう者の
ことやろう。そいと同じくさ。まつやん掘に
関係するエピソードば収集して、地取捜査で
集めた情報と総合的に絡めて判断することだ
よ」
「地取って何かね？」と今度は山神が口を
挟んだ。

「もう、せからしかね。後で説明すっけん、
ちよっと黙って話ば聞いてくれんね。」
「分かった、分かった」と島田が彼を宥める
ように言った。
「そいぎんたあ、まつやん掘ば中心に、一応
東西南北に放射状に地を取ろう。遊び半分や
けん、厳密に地を割らんよ。境界線は適当で
良かし、他のもんの地に入っても構わんこと
にしようよ。話のできる知り合いがおったら、
他所に入って良かことにせんね？」
「異議なし！」と永い間、故里を出て帰った
ばかりの山神が不安を吹き飛ばすように叫ん
だ。この地に住んでいたのは高校時代まで、
禄に親類縁者との付き合いもないから、知り
合いを見つけるだけでも大変だと思った。
「山神は帰って来たばかりで無理やけん、地
取りはせんちや良かよ。特命捜査とか捜査本
部のデスクに当たる事務を頼むよ。俺が指揮
するから心配すんなよ」と今度は山神が内藤
から宥められた。

「地割りには、住居で決まっよ。堀の北の方は北小路のオイの担当、東側に向かつては、本町の中島、西の方は西小路の島田、南は北島で良からう」四人に意義はなく黙ってうなずいた。

「捜査本部は、俺が借りている離れの部屋にせんね」山神は、先程からしきりに部屋を覗く素振のある北島の奥さんに気兼ねして言った。みんな首を縦に振って了解した様子だった。

「毎月一回捜査会議をやるう。忘れんように月のいっちゃんへ一番〜始め、一日に寄合いをせんかね。一日会へついたちかい〜たいね」北島の意見に反対する者はいなかった。

「ところで、さっきのまつやん堀の『鑑どり』は、どぎゃんすつとね」北島が拘りを保持って訊いた。

「そりゃあ、町に顔の広か、あんと俺で受け持とうよ。あの堀について探れば何か因縁

話の出て来るよーと内藤が言った。
「そいぎい、毎月一日の夕方に、山神の部屋
に酒とツマミば持って来っぎ良かとか」と島
田が相好を崩して言った。
「そぎゃんばってん、情報ば集めて来いよ。
単に酒盛りじゃなかけん」と内藤が釘を刺
した。島田は、ウン、ウンとうなずいて立ち
上がり、それを潮に全員が立って玄関の方へ
向かった。誰かが尿意を訴えたが、
「そぎゃんとは道端にでんせんか。シヨンベ
ンも草の肥料だ」と島田が外へ出たので、他
の者もつられて外へ出た。ムツと青葉の匂い
がむせる五月闇の中に、ミカンの花の芳香が
漂っていた。昔の人の袖の香ぞする、と古歌
にあつたのを山神は思い出し、昔好きだった
女の子がこの町のどこかに住んでいる気がし
た。今夜は帰郷した幸せを存分に感じて眠れ
そうになかった。山神は中島と島田と内藤の
姿が、それぞれの方角の五月闇の中に消え入
るまで玄関先に佇んでいた。

五梅雨の走り
山神は毎日の日課のように自転車走らせ
て、木立の緑と草の緑が鮮やかな故里を走り
回って、子供の頃と変わらない景色に出会う
と感慨に耽ったし、又新しい道路の敷設など、
その変貌の著しい場所では慨嘆して過ごして
いた。浦島太郎で知った顔に合うことは皆無
だった。町中に人通りがないのが不思議な感
覚だった。彼が高校を出る頃でも、朝晩は通
勤の老若男女の往来があつたし、本町などの
商店街は婦人の買物客で活気に満ちていた。
二軒あつた映画館もとつくなく、混雑して
いた本屋もなくなり、ゴーストタウン化して
いた。これは全国的な地方の町の現象だとは
当然に知つていたが、我が身がそこへ放り込
まれる日が来たのはショックだった。もう、
二度と昔の日に立ち返るわけがない、と自身
に言つて聞かせるしかなかった。
六月一日は朝から雨模様だった。五月雨の
延長のようで、北島家の鬱蒼とした庭木の葉

を断続的に烈しく雨が襲っていた。陽春に、
この離れに越して来た当初は、まだ若葉の芽
吹き初めて母屋の方まで見通せたものだっ
山神は部屋の片付けと清掃をして、夕刻に皆
が集まるのを心待ちにして外出は控えた。
「よう降りようね」と清酒とスルメを提げて
内藤鉄夫が一番乗りだった。
「車で来ると酒の飲めんからね。仕方なか
けん、歩いて来たよ。遠へとおゝはなかばっ
てん、雨に濡るっとは好かんよ」と次に中島
がズボンの裾をハンカチで拭きながら入って
来た。彼が風呂敷包みを解くと大皿に煮物と
小海老や雑魚の佃煮が大盛りになっ
やがて北島が、奥さんに重箱を持たせ、自分
はウイスキーを抱えて来た。
「うち人に、あんまり飲ません」と頼みま
すよ。糖尿持ちで酒は体に毒なんです」と奥
さんが陰しい顔だった。
「せからしか！自分の健康は自分で管理すつ
けんが心配せんでよか」と奥さんを帰した。

北島がテンブラや焼き鳥などが盛り合わせの
豪勢な重箱を開いていたら、中島が、
「甘かもんも口にせんといかんよ」と自分の
店の羊羹の紙包みも開けた。この城下町の伝
統的な名産で、山神の父はこの羊羹の行商で
糊口を凌いでいたのだった。島田はまだ来て
いないが、北島の音頭で早々に酒盛りを始め
た。三十分ほど遅れて、島田の胸板の厚い体
が部屋に入ってきた。
「オオ、閑人どんが集まっとうな。オイ達、
百姓は農繁期に入っとうぞ！」と威張った口
振りで、疎らになった黄ばんだ歯を見せた。
「そぎゃん言うばってん、田植えでん、除草
でんが、今は機械で楽しようとやろうが。昔
の農家の苦労とは較べもんにならんよ」と北
島が酒の入った恵比須顔で反論した。
「そいぎい、顔ぶれの揃うたけん、第一回捜
査会議が始むつよ」と内藤がほんのり紅く頬
を染めて宣告するようにつた。
「おい、ちよつと待て！オイにも一杯飲ませ

んか」と島田が一升瓶から手酌で冷酒をコッ
プに注いだ。
「いや、皆が酔へえ」いくろうてしまいう前に
会議ばせんとメチャメチャ言うやろう」と内
藤が島田に軽く会釈し、
「先にまつやん堀の鑑へかん」ば輝男ちゃん
と調べてみたよ。あんたから発表してくれん
ね」と北島に話を振った。
「うん、堀の南側に昔、養鶏場のあったと、
知ったどうか？今はもう無かばってん、引越先
の鍋島へ佐賀市へまで行ったよ。中学の同級
生のおったけん訪ねたら、三つ、四つ年上の
兄貴がいてね。久し振りや、と歓待してくれ
たよ」
北島の話に、時々内藤が口を挟んだ。話の
内容を要約すると、堀の公園山側の岸边にあ
ったクロ―バーの土手に野菜や薪を積んだ車
力を停めて草の上で、よく中年の親父が弁当
を食べたり、日和の良いい時季には昼寝してい
たのを、その人は目撃していた。

「その同級生の本名は、アルバムば調べりや
分かるばってん、やっちゃんと呼んで、よう
遊んだよ。もう三年前にガンで死んでしもう
とったよ。仏壇に線香ばあげて帰ったよ」と
北島の声音は湿っぽかったが、容貌は酒が回
って湯がいたタコ坊主みたいになっただ。
「この元養鶏場の兄さんの話をヒントに、オ
イも付き合いのある同級生ば訪ねてみたよ。
昔は公園山のほんに近か所に家のあった大野
君ば訪ねたよ。まつやん堀の傍で遊びよった
記憶の頭ば掠めたけんね」と内藤が話を引き
継いだ。
「大野は今、何処に住んどうとね。オイもよ
う知つとうよ」とやつと酒を胃の中に流し込
んだ島田は落着いた顔になっただ。
「そいが中町におったとが、兄貴の一家が大
阪から引き揚げて来たけん家ば譲り、今は神
崎の吉野ヶ里の近所に新居ば建てとったよ。
電話して行つたけん喜んでね、えらいご馳走
になつたうえ、おまけに面白か話もあったと

よー
吉野ヶ里とは、工業団地開発予定のところ、
発掘で大規模な弥生時代の環濠集落の跡地と
判明し、一時は幻の邪馬台国の発見と全国的
に騒がれたこともあった。その後『吉野ヶ里
駅』が新設され、全面的に公園化されて出土
品の展示館・売店など観光地となっている。
「早よう、面白か話ばせんか」と気の短い島
田が急かせた。内藤は島田なんか眼中にない
ように、もの静かに語り始めた。
「うん、まつやん堀の傍で、兄貴達と混ぜ子
にされて遊んどった時に、確かに車力の停ま
とった臃気な記憶があるそうだ。そいだけじ
やのうて、公園の傍の神社の近くに、桜祭り
の頃だけトコロテンとかアイスクリームとか
駄菓子とか売る店のあって、普段は無人の小
屋のあったそうだよ。兄貴達につんのうで
へついで一行つて、その小屋の前ば通ったら、
中から大人の変な声がしたみたいだよ。兄貴
達は板壁の隙間から覗いて、ボボ（性交）し

よんさあ、って言って、替わりばんこで覗き
んしゃったそうだ。混ぜ子の大野はそこまで
しか記憶しとらんそうだ」
昔は兄弟姉妹が多く、兄達が小さな弟や妹
を連れて子守を兼ねて遊んだものだ。自
分達だけが遊んだら叱られるので、幼い子
遊びのルール無視で仲間に入れ、関東では
『味噌っかす』『佐賀では』『混ぜ子』と称して
いた。内藤は物静かに更に話し続けようと
した。喉の渇く話やなあ「北島がウイスキー
の水割りを一気に飲み干した。島田もニヤニ
ヤしながら、
「オイも覗きたかったにやあ」とコップ酒を
呷った。中島は自分で持参した羊羹の一切れ
をツマミにビールのコップを傾ける妙な酒の
飲み方をしていた。皆の声が途切れたのを潮
に、内藤の続き話が始まった。
「そいで、オイは勘が働いたよ。大野君が混
ぜ子やってたと言うことは、オイ達も同じで、
こんな話は四、五才頃のことだよ」

「これは古い話だねえ。単純に昭和二十五年頃、この町が舞台かね？」と山神は計算した。われども何にも覚えとらんよ」と中島は相変わらずビールを飲んで羊羹を齧っていた。ルツと清酒を啜り、話の続きを催促した。「おいで、どぎゃんしたとか？」と島田はズ「うん、そいけんが中町の大野の兄貴に聞いた方が色々と情報があると思いい、あいつに兄貴に電話させ、翌くる日に又、大野の兄さんに会ったよ。さすが年上だけあって、良う当時のことば覚えとんさったよ。その神社の傍の小屋の前で、まつやん掘の道端で見た野菜とか薪ば積んどったのと同じ車力ば、よう見かけんさったそうだ。小屋の中でボボしよったのは、たまに堀端で弁当ば食いよった親父さんに間違いのうて、相手は誰か知らんが、同じ年恰好の髪の毛の長か小母さんだったそうだよ」と言っでビールで喉を潤した。

無かばってん、兄貴と大野の兄さんは同い年
と思うよ。兄貴が何じゃ知ったとか聞いてみ
つよ」と名残薄い髪を撫でながら、島田が物
好きな顔つきをして乗り気になった。
「俺はウターン組だから、まだ町の人に溶け
込みきらんで、何も話はないよ。もう、ちょ
っと待ってくれんね」と山神は言った。
「そいで良かった。今度、オイが何かあった
ら連れて行ってやるよ」と中島が満腹して腹
のベルトを緩めながら話を続けた。
「今日の北島と内藤の話ば聞いて参考になっ
たよ。探偵ごっこすつとは初めてやけん、何
ばして良かかサッパリ分からんで、なあもせ
んかったよ。今月の羊羹組合の寄り合いで、
今聞いた話ば切り出して、何か情報ば取って
報告するよ」
「そいぎい、割り当ての地取りで、車力の男
と小屋でボボしとった女が何者か、その素性
ば探調べてくれんね」と元刑事の内藤が捜査主
任みたいのに指示をして会議の方は終了とした。

「雨の烈しゅうなっただね。今夜は早めに仕舞いにせんね。オカズの残り物は分けて持っていて帰ってよ」と北島がお開きを宣告したら、各自が携帯電話で家の者に車を回すようお願いいつけていた。」「山神、お前も携帯ば買え！」とすっかり酔いのまわった島田がおぼつかない足取りになっ
ていた。」「今のところ、電話をかける相手もおらんし、大家さんの輝男ちゃんに伝言してよ」
山神は迷惑をかけるけど北島家の呼出電話に甘えるつもりでいた。北島の屋敷の庭木を打つ雨音が更に烈しくなった。
六朝顔の花
山神勉は雨季の六月の外出は極力控え、新聞や週刊誌に目を通したり、ゴロ寝してテレビの画面を何気なく眺めながら気ままに過ごした。四十七年間働きっぱなしの反動でもあったし虚脱感でもあった。これは神様から頂いたご褒美の至福の時間と割り切ることにし

た。この故里に馴染んだら、何か働き口を探
し、残った時間の暇潰しをしたら良いのだ、
と達観もしてみた。北島輝男の家人が、毎年
植えているのか、離れの窓際に朝顔の蔓へつ
るゝがグングンと日を追うように伸びていた。
真夏の日除けに丁度良いと感心した。地球温
暖化の影響か、品種改良のせいかわからないが、
七月を前に朝顔は紫や青やピンクの花を咲か
せ目を楽しませた。北島の屋敷も夫婦二人暮
らしだった。子供達は独立して核家族をなし
ていたが、いずれ長男一家を呼び寄せて、自
分らは有料の老人ホームで暮らしたい意向が
あるようだった。だが、それもまだ先のこと
で五体満足なうちは働く、土木建設業界で
懇意の連中と、百歳まで働こう、と『百働
会』を結成したと聞いた。だから、今の住居
に当面の心配は一切しなかった。七月一日が
来た。朝から夏雲が湧いていた。今夕は、皆
がここに集まると思うと、つい浮き浮きとし
た気分になった。

「朝顔が沢山咲いたでしょう」
北島の奥さんが近づいて来た。地味な薄藍
色のノースリーブのワンピース姿だった。北
島より七つ若いそうで、まだ胸も張っていて
女の華やかさの片鱗はあった。
「しみじみ花を眺める年が来るなんて、若い
頃には考えもしませんでしたよ。人生って、
こんな風にして舞台の主演が変わって行くっ
て実感していますよ」
「まあ、東京にいた人はお洒落な台詞を口に
出来るのですね。うちの人は野暮で気の利い
た言葉なんか知らんですよ」奥さんは笑い
ながら、お終いの方は方言になった。
「夕方は、又寄り合いでしょう。男衆は何か
と云うては酒飲んで、最後は病院行きなんで
すよ。山神さんも気をつけんしゃいね」と母
屋へと戻って行った。彼は、千利休が太閤秀
吉を茶室に迎えた時に一輪だけ残して朝顔の
花をむしり取ってしまい、それを生け花とし
た風流を思い描いたが、皆が集まるのは夕刻

で花はすでに萎んでしまっている、と気が付いた。今日の夏の一日は長くなると覚悟した。お日様がまだカンカン照りの五時に一番乗りしたの、羊羹屋の中島豊一だった。家人に車で送ってもらった、と缶ビールの箱入りを抱えて部屋に入ってきた。冷房はなかよ。扇風機で我慢してくれんね。と山神はスイッチを押した。よかよ。窓さい開けときや、日の暮れたら涼しゆうなるけんね。と中島は機嫌良かった。何か良いネタでも掴んで来たような表情が垣間見えた。例によって、奥さんに握り飯とかテンプラを盛った大皿を持たせ、自分はウイスキーのボトルを抱えた北島が、山神が奥さんも加わるように誘ったが、藤も島田もそのうちに来るよ。と入って来た。今日は暑かったなあ。もう始めようよ。内否。はいや。ですよ。女子。おなご。は男衆の前で口ばパクパク開けられんとですよ。と

笑って、そそくさと母屋へ戻って行った。
「うちんとは、酒は飲まんけん、お酌もせん
で悪かね」と北島は弁解した。そこへ、内藤
鉄夫がタオルで額の汗を拭きながらやって来
た。
「今日は、息子達が車で博多さい行って、ま
だ戻らんけん、送ってもらえんで歩へあゆめ
んで来たんだよ。ほんに暑かね」と赤ワインの
ボトルとチーズの箱を差し出した。内藤の自
動車は配達兼用のワゴン車だった。
「島田はどうせ又遅るつとやろ。喉を潤しな
がら第二回目の捜査会議をやるとするか」
すすかり捜査主任格に納まった内藤の音頭
で報告会が始まった。先ず、中島が手を上げ
て成果を発表した。
「この前の羊羹組合の寄り合いで、まつやん
掘端の車力の親父とか神社の側の掘立小屋の
話ばしたとよ。そいぎい、駅前A本舗の健
ちゃんが、子供の頃に車力に焚きつけの枯れ
枝の束ば積んだ親父さんが出入りし、工場の

石炭置場の脇に降ろしよったとば、微かに覚
えとうって言ったよ。人相は覚えとらんけど、
もう若うはなかつたごたあよ。そいから、オ
イの向かいのB本舗のサブちゃんも同じよう
なことば言いよったね。そいで、サブちゃん
のお袋さんが体の不自由になんさって、佐賀
の老人ホームにおらすけど、頭はすっかりし
とんしゃって、昔のことば良久知つとんさあ
けん、行ってみろってよーと言つて缶ビール
にのプルトップをプシュッと引つ張つた。
「あんたの店には出入せんかつたとやろか
ね？」と北島がウイスキーの水割りを啜って
訊いた。中島は首を横に振つて、何も覚えて
いない仕草をする。ビールをグビツと喉を鳴
らして飲んだ。
「じゃあ、サブちゃんのお袋さんに聞き込み
だね。暇をみて、山神ば連れて行つてくれん
ね。こいは特命捜査だよ。」と内藤が指示した。
「お見舞ちゆうことで、羊羹ば包んで行つて
みるよ。何か手掛かりのあると良かね。山神

よ、オイの都合に合わせて行ってくれるね。
お前は、サンデー毎日で良かね」と中島が皮
肉な口振りで誘った。
「なんば、格好つけようとか！中島！お前も
せがれに店ば任せて遊びようだけやっか」と
そこへ島田太郎の丈の高い図体がスイカの大
玉を抱えて入って来た。
「島田！お前は壁に耳あり、障子に目ありだ
なあ。そのスイカ冷やして来たろうな。いつ
の間に来とったとか」と内藤が笑い飛ばした。
「当たったり前じゃろう。生温かスイカば食え
るか。山神、切つてやるけん、包丁ば持って
来い」と島田は命じると、今日は面白い話が
あると自信たっぷりの表情だった。
「そいぎい、グツと空けて、話ば早う聞かせ
ろよ」と中島が缶ビールを手渡した。
「うん、話ばすつぞ。山神、しっかりメモば
取れ！実はな、五つ上の畑田の兄貴に会って
来たんじゃない。」
畑田は、島田の住居のある西小路の隣の集

落である。二本目の缶ビールを一気飲みする
と、彼は口の周りの泡を手で拭いた。皆、固
唾を呑んで彼の言葉を待った。
「兄貴は小学校四、五年生の頃、よう近所の
悪がきば連れて、公園山の芝生でゾウグリ
へ力較べの組み打ち」ばして遊びよったそう
だ」
皆、目を皿のようにし島田を注視した。
「遊びくたびれて、山ば降りるぎんたあ、や
っぱい、神社の側に空いた花見小屋のあって、
焚きつけの柴ば積んだ車力のあつたてよう。
誰へだい」がおるとか気になつて板の隙間か
ら覗くぎい、チヨンベへ性交」ばしよんさつ
たけん、吃驚したて言うたよ」
「チヨンベ！」と山神が素っ頓狂な声を張り
上げた。
「お前、地元の方言ば忘るつな！ボボのこと
じゃ。男と女がツグつて腰ばムクムクさせよ
うとば、見物したそうじゃ。」
性交の隠語は全国各地に色々あるが、山神

は根っからの佐賀の人間の島田から聞いて、
子供の頃に使った言葉を次第に思い出し、
た。ツグるとは、牡蟬と雌蟬が木の枝で尻と
尻で結合していたのを見つけ、
だ。小鳥の番へつがいから派生したセ
ックス行為の隠語かも知れない。島田が口を
閉じ、三本のビールを口にしたら、中島が
冷やかした。
「何じゃ、たったそいだけか？お前のはエロ
話だけで中身がなあもなかやつか」
「待ちんしゃい！まだあるとよ。兄貴達は別
の日に、まつやん掘端で、車力ば引くその親
父さんと、後ろからそいば押す女ば目撃した
とよ。男は粗末な服ちゆうほかに覚えとらん
ば。女はモンペ穿いて上は白か割烹着、
長か髪ば首の後ろで括つとったことも覚えと
うて言うたぞ」
「そうでしたら、髪を振り乱した白装束の
女と一致するかも知れんね」と山神は真剣に
に感心した顔を見せた。

「そぎゃんやろう。こいで捜査の一步前進した。元刑事の内藤鉄夫が、捜査の常道とは地道に事実を積み重ねて行くことやけん、これは良か聞き込みだよ、と分別のあるところを示して島田を誉めた。」六月は、大雨で道のあちこち浸かって、道普請の多かったけん、オイはなあもしとらんよ」と北島が真っ赤な顔で弁解した。「オイも今月は、なあも話のなかよ。車力の親父ば、町の風呂屋で見かけたちゆう話は聞いたけど、もう、とつくの昔に二軒とも廃業しとらすけん、行方も分からんし、どうにもならんやろう」と内藤も済まなさそうにウイスキーを水で割ることなくストリートで舐めていた。」今月の捜査方針はどぎゃんすつとね」と北島が催促した。」中島と山神で折合いばつけて、サブちゃんのお袋さんに当たってくれんね。他の者は、

地取りの縁故者から何でも良かけん、聞き込
んで来てくれんね」と内藤は酒の勢いのせい
か、頭の回転も口の滑りも絶好調になってい
た。
「俺はこれから暑いから、なるべく図書館で
過ごすよ。ここにいなかったら、図書館に迎
えに来てよ」と山神は中島に頼んだ。
「じゃあ、会議はこの位で、後は酒盛りで、
ああぎ、ああしこ飲み食いせんね」と北島が
持参した重箱を回した。ああぎ、ああしこ、
とは、あればあるだけの意で、山神は又方言
の記憶を一つ取り戻した。時々庭から黄金虫
が飛んで来て網戸に当たる音がした。山神は
子供の頃、この虫をギンギン虫と呼んでいた
のを思い出しながら冷酒を口に運んだ。
七蟬時雨
七月も下旬だった。山神勉が卵かけご飯と
味噌汁の朝飯をしよぼしよぼと口に運んでい
たら、中島豊一が車で迎えに来た。
「えらい待たせたね。次の会議で何か発表せ

んば、皆からくるわるへ叱られるゝつごたあ
気のしてねーと佐賀市街の北の方の老人ホー
ムにいろサブちゃんのお袋さんと面会の段取
りが付いたようだった。警察官でもないのに、
仰々しく聞き込みなんて表に出したら、ホー
ムの事務局から拒否される恐れがあった。息
子のサブちゃんを説得し、間に入ってもらっ
てお見舞い名目で、お袋さんの昔話を聞くこ
とにしたという。左方の天山山脈に夏雲がか
かり、空は抜けるほど高く紺青に晴れ渡って
いた。
「新道がいつぱい出来たね。昔と大違いだ
よ」と山神は窓外の田んぼを見つめていた。
「ああ、田ん中ば潰して、道ばあっちこっち
に通したね。車社会やけん仕方なかね。」
「子供ん頃に、遠足で川上さい歩いた旧道は
まだあるよね」と山神も方言に少しずつ感染
していた。
「あるところよ。そぎゃん細か道はもう通ら
んから、よう知らんけどね。ホームにはすぐ

着くよ。朝食の済んだ頃、見計らって行くご
とサブちゃんの手筈ばしてくれたよ。午後は
昼寝ばしよんさあごたあね。年は九十五歳に
なんさったそうやけん、要領ようやって長居
はいかんよー
新道を抜け北山ダムへの道路を横切ると、
やがて車は青葉の梢が覆い被さるようになら登っ
た山路を右に左にハンドルを切りながら登っ
た。ー嬢捨山に行くようだねーと山神が冗談
めかして言ったが、中島は返事しないで、ひ
たすら前方を注視していた。鬱蒼とした樹林
の道を登りつめたら、白亜の瀟洒な施設が凄
絶な蟬時雨に洗われていた。受付で用件を告
げると、手を消毒しスリッパに履き替えるよ
う指示され、洋風の大広間に通された。待つ
ことのしばし、介護士の押す車椅子でサブちや
んの母親は現れた。
ーあんた、向かいの豊ちゃんやね。よう来ん
しゃったね。ほんに懐かしかよーとB本舗の
お袋さんは喜んだ。血色が良く水まんじゅう

みたいになつくらしい肌合いだった若かった
日のサブちゃんのも親の面影を、皺くちやの
お婆さんの顔に懸命に見つけようとしている
ような中島の眠つきだった。
「あたしゃ、もう九十五ですけん、お迎えの
来るとば待つとるだけですよ」と精一杯の冗
談を言った。中島がお見舞に持参した水羊羹
を慇懃に差し出した。
「うちの店の新製品ですけん、食べてみて下
さい」
「まあ、うちも羊羹屋ですよ。そいばってん、
うちの三郎は、何の工夫もせんで昔ながらの
練り方の羊羹ばっかし作る能無しですたい。
やっぱい、男は若つか時に一遍都会に出んと
いかんですよ。あんたは名古屋におんさった
でしよ」とお婆さんが笑むと眼が皺の中に
埋まった。
「そうです。五十の頃まで名古屋にいました。
父が亡くなったもので、跡継ぎに帰って来ま
した。本当は自動車の部品工場で働いていた

んですが、田舎ではいつの間にか、自動車の
セールスマンをやったことになっていて、面
倒臭いから、もうセールスマンだったことで
通しています」と都会にいたと言われ、中島
は滑稽なほど他所行きの言葉に改めていた。
世の中は、虚偽でも嘘でも長いことそれで通
していたら、真実化してしまうものらしい。
「あら、そうね。そいは入歯の落っちゃえる
位おかしかね」と声をあげて笑ったら、お婆
さんの顔中が全部皺になった。
「ちよつと昔の話ば聞きたかです」と中島が
方言に戻って、本題に入ろうとしたら、
「あんた、誰ね？」と山神が質問された。
「わたしは駅前に住んでいた山神といいまし
て、父は羊羹の行商をしていました」
「エッ、山神さんって！女衆に交じって、か
つぎ屋さんば、しよんさった男の人ね、よう
覚えとうよ。働きもんやったねえ。うちの羊
羹も売ってもろうとったよ。あんたもよう来
なさった」と機嫌良かった。

「母は内職で裁縫とか編物していました」と
山神が言ったら、中島がなかなか本題に入れ
ずにイラついたように、余計なことを言うな
とばかりに、そつと肘で彼を小突いた。
「あのう、車力ば引いて焚き付けの柴なんか
ば行商しよった親父さんについて聞きたかと
ですが、」とやつと中島豊一は話を切り出し
た。
「ああ、三郎から聞いたよ。そいけん、
あんたの来つとば楽しみに待つとつたよ。
あたしや、若い時分から簡単な日記ば付けよ
って、そのうち気にしとうことは帳面に写し
直したよ。そいば持つて来たよ」と一冊の大
学ノートを袋から取り出し、首に提げた老眼
鏡をかけた。
「親しう、しよつたのですか？」と山神が方
言で意気込むと、
「初めて来んしやつた時は、乞食んごとボロ
の国民服ば着とつて気ん毒でね。薪へたき
ぎゝば運んでもろうた後、ようお茶ば出して

や っ た よ 。 そ の う ち 野 良 着 に な ん し や っ た ね 。
う ち の 畳 に 上 げ て 弁 当 ば 食 わ せ た こ と も あ っ た
た よ 。 飯 食 っ た ら 、 胃 に 良 か け ん ち ゆ う て 、
逆 立 ち ば し よ ん さ っ た 。 焚 き 付 け の ほ か に 、
塩 漬 け の ウ リ と か キ ュ ウ リ 、 ナ ス ビ も 売 り よ
ん さ っ た ね ー と ノ ー ト を 丁 寧 に め く り な が ら
言 っ た 。
「 米 の 通 帳 も 持 っ と ん し や ら ん で 、 岩 松 の 百
姓 家 に 行 っ た と て 、 他 所 も ん や け ん 、 米 ば 売
っ て く れ ん そ う だ っ た よ 。 可 哀 想 や け ん 、 う
ち が 闇 で 売 っ て や っ た ぎ い 、 兵 糧 の 手 に 入 っ
た っ て 喜 び ん し や っ た よ ー と 話 が 続 い た 。 往
時 は 米 の 配 給 制 度 で 米 穀 通 帳 が 無 い と 、 農 家
な ど か ら 闇 米 を 調 達 す る し か な か っ た 。
「 そ ぎ や ん し よ る う ち に 段 々 慣 れ て 来 て ね 、
向 こ う か ら 世 間 話 ば す る ご と な っ た と よ 。
言 葉 の 違 う け ん 、 佐 賀 ん も ん じ や な か と 、 初
手 か ら 分 か っ と っ た よ 。 名 前 は 名 乗 ら ん け ん 、
こ っ ち か ら も 訊 か ん よ 。 他 の 羊 羹 屋 に も 出 入
し よ っ た が 、 皆 、 『 こ す か 親 父 』 と か 『 ケ チ

親父『としか呼んどらんよ。値切ってんが、
絶対に負けてくんしゃらんね。在所で何
か不始末ばかりしたとか、戦災で家ば焼け出
されたとか、とにかくおられんようになった
けん、親の代の縁者のおう祇園川の上の方ち
ゆうか、千葉城址の裏ちゆうか、そこんにき
に住んどうちゆう話やったね。そぎゃん風に、
ここに書き残しとうよ。あんまり、よう喋る
人じゃなかったね』
『家族はおったとですか？』と山神がつられ
て方言で訊いた。
『ああ、おったと憶えとるよ。ちよつと、待
ちんしゃい』と又ページをめくった。
『うん、ここに記録しとった。あたしゃ、会
うたことのなかばってん、連れ合いは、料亭
とか宿屋の飯炊きとか賄婦ば、幾らでんが掛
け持ちして、朝から晩の遅うまで働き、帰り
の夜道の遠かけん、公園山の神社の横んにき
に、別々に住むごとなったて聞いとるよ。こ
の奥さんとの間に娘子のおって、その子と一

緒に住んどうって言ったメモの残ったうよ。
そいで、女房も娘も占いの上手で、前世でん
が調べてやることも出来るって言った記録も
あるね。
「車力の親父さんが初めて店に来たとは、い
つ頃のことかメモにありますか？」と山神が
ここで聞き逃したら面倒だ、と真顔で訊ねた。
「ちよっと待ってくんしゃい。ああ、昭和二
四年四月としか控えとらんですよ。そいから
翌年の秋までくらい出入りしんしゃって、後
はパッタイ音沙汰の失へのうなったとで
す」とサブちゃんのお袋さんが語ったところ
で、さっきの介護師が戻って来て、
「もう今日は、良かですか？今からちよっと
検査のありますけん」と車椅子を押して去っ
た。山神と中島は初期の目的は達した感もあ
り、名残惜しそうな素振のお袋さんと手を振
って別れた。外へ出たら、先程にも増して激
しい蝉時雨が瀑布の轟音のようには響いてい
た。

八月一日になった。北島の屋敷の庭も相変
わらず早朝から、ワシワシ、ジージと喧騒
な夥しい蟬の鳴き声に包まれていた。八月と
知ってお盆と連想し、帰郷して一度も父母の
墓参りをしていないことに気が付いた。お盆
までには一度墓場へ行こうと顔を洗いながら
考えた。タ刻からは、第三回目の捜査会議とい
かり合いというか、要するに酒の飲み会で仲
間が集う日だった。今日は話のネタがあるの
で気軽だった。お喋り好きな中島豊一が、老
人ホームのお婆さんの話を面白おかしく脚色
して語るだろう、と思った。今日も夕方まで
図書館で涼んで過ごそうと思った。
山神の実家は、先祖に得体の知れないこと
もあつたが、今更どうこうする気はなかつた。
母の実家は、この地で手広く製材業を営んで
いた山杉家だった。ただし、母は山杉の血筋
の人ではなく里子として育っていた。父も又
由緒が定かではなく、北海道の屯田兵の末裔だ

後
に
し
た
。
時
に
、
山
神
勉
二
八
歳
の
独
身
青
年
で

起
こ
ら
ず
、
彼
は
誰
の
見
送
り
も
な
く
再
び
故
郷
を

父
の
骨
壺
も
埋
け
た
。
石
に
銘
な
ど
彫
り
こ
む
気
も

し
、
や
は
り
同
じ
場
所
を
掘
り
起
こ
し
て
母
の
隣
に

石
を
目
印
に
置
い
た
。
そ
れ
か
ら
数
年
で
父
も
病
没

掘
っ
て
骨
壺
を
埋
め
、
漬
物
石
み
た
い
な
大
振
り
の

え
ず
、
仕
方
な
く
墓
域
の
隅
っ
こ
の
榎
木
の
根
元
を

に
没
し
た
が
、
山
杉
家
の
墓
に
は
納
骨
さ
せ
て
も
ら

前
の
集
落
の
山
中
に
あ
っ
た
。
元
来
病
弱
な
母
が
先

の
名
残
で
名
瀑
『
清
水
の
滝
』
の
あ
る
旅
館
街
の
手

道
は
な
か
っ
た
の
だ
ろ
う
。
山
杉
家
の
墓
域
は
土
葬

は
廃
業
し
て
お
り
、
当
面
羊
羹
の
行
商
し
か
生
き
る

と
し
、
終
戦
で
帰
郷
し
た
ら
、
す
で
に
山
杉
製
材
店

び
軍
属
に
復
帰
し
東
北
や
北
陸
な
ど
の
部
隊
を
転
々

で
働
い
て
い
た
、
と
聞
い
て
い
た
。
先
の
戦
争
で
再

い
て
、
母
と
見
合
い
結
婚
し
、
一
緒
に
山
杉
製
材
店

久
留
米
の
部
隊
に
い
た
時
に
、
仲
立
ち
す
る
人
が

軍
属
と
な
り
、
陸
軍
施
設
の
建
築
で
各
地
を
流
れ
て

札
幌
で
製
材
屋
に
丁
稚
奉
公
し
た
。
そ
の
後
は
陸
軍

と
言
っ
て
、
十
五
の
時
に
室
蘭
の
家
を
飛
び
出
し
て

あ	田	「	し	か	「	始	藤	だ	「	を	奥	ワ	「	ら	が	ボ	れ	あ
っ	舎	お	て	仕	サ	め	が	姿	捜	片	さ	イ	よ	カ	、	ト	て	っ
か	に	前	ポ	事	ン	た	来	の	査	手	ん	ン	う	ボ	こ	ル	い	た
知	禄	、	ツ	を	デ	。	た	い	主	に	に	に	冷	チ	う	を	な	。
ら	な	何	リ	し	「		始	内	任	提	オ	口	え	ャ	暑	持	い	そ
ん	仕	ば	と	た	毎		め	藤	さ	げ	カ	を	と	の	う	っ	の	れ
が	事	寝	眩	い	日		る	鉄	ん	て	ズ	つ	る	煮	て	て	で	以
な	の	ぼ	い	な	も		こ	夫	の	入	を	け	ね	付	来	切	、	来
「	あ	け	た	「	辛		と	を	遅	っ	持	た	。	の	た	っ	現	、
と	っ	よ	。	と	い		に	か	刻	て	た	時	先	仕	。	顔	状	父
額	。	う		山	ね		し	ら	し	来	せ	、	に	事	珍	で	は	母
と	ボ	と		神	。		て	か	よ	た	自	例	始	に	しく	中	知	の
頭	ラ	か		が	涼		、	っ	う	「	分	の	め	ら	早	島	る	墓
部	ン	。		ワ	し		先	た	ね	と	は	如	よ	ん	め	豊	由	域
の	テ	六		イン	く		に	。	「	北	ウ	く	う	、	に	一	も	に
境	ィ	五		を	な		酒	会	と	島	イ	北	、	言	島	が	な	足
目	ア	ば		飲	っ		盛	議	北	が	ス	島	と	い	田	ワ	か	を
も	な	過		み	た		り	は	島	ま	キ	輝	島	な	太	イン	っ	踏
ない	ら	ぎ		干	何		を	内	が		「	男	田	が	郎	の	た	み
		て										が	。	が			。	入

日焼けした島田が目を三角にして言った。
「うちは土木業やけん、土方仕事で良かなら
あるよ。ばってん、都会で綺麗か仕事ばっか
しのあんたが、泥まみれになれるとね。そい
に、力仕事やっけん、ギックリ腰にでんなっ
たら、人生一卷の終わりだよ」と北島のアド
バイスは親身だった。
「そぎゃんたい、山神！年金で何とかなっと
うとやろう。そぎゃん、暇ば持て余しとうな
ら、畑ば貸すけん、家庭菜園でもしてみろ。
そいにしても内藤は遅かにや、罰に高かワイ
ンば持って来っごと言わんばな。アイは売る
ごと店にあるけんね」と島田は携帯電話を握
って内藤に図々しい電話をした。
「いやいや、急に旅館から立て続けに瓶ビ
ルの注文の入ってね。ほんに配達で忙し
かつた見かけによらず、案外お人好しの内藤
鉄夫は、本当にフランス・ボルドー産の
高級

ワインを手に抱えていた。
「では、第三回目の捜査会議だね。特命班の
発表を頼むよ」とやっと内藤が来て会議とな
った。内藤以外はほろ酔い状態になっていた。
「では、サブちゃんのお袋さんからの聞き込
み結果を発表します」と舌の滑りが益々良くな
った中島が口火を切って、先日老人ホーム
で聴取した内容を要領良くまとめて語った。
さすがに、皆が黙り込んで耳を傾けた。
「山神、何か付け加ゆつことのあつか？」と
彼から最後に話を振られた。
「うん、身の上話ばせん親父は、やっぱり胡
散臭い親父だと思うよ」と山神も酒酔いで、
佐賀弁だった、標準語になったり一貫しな
かった。
「ちよびつとは、煮詰まって来たんじゃないか
ね。車力の親父の素性と飯炊き女ばしよった
女房、そいとその娘ば、洗う仕事の出来た
ね」と内藤が締め括った。
「ほかに誰か報告のあるね」と北島が見回し

た。島田も内藤も首を振り、
「オイもなかよ」と北島も笑った。
「今月の捜査方針を頼むよ」と山神は内藤に
頼んだ。
「うん、オイが祇園川の上流のにきば探つて
みるよ。山神、お前も手伝うてくれよ。そい
から、料亭とか旅館の聞き込みも、せんばい
かんね」と内藤が皆の顔を見回した。
「そいはオイがするよ。役人ば接待の宴会で、
料亭と旅館には顔のきくけんね」と土木業の
北島が得意そうに申し出た。
「オイが、昭和二十四年の春にこん町に転入し
たもんば、当たってみようか。役場の課長ば
しよった多美子が近所に住んどつて、息子が
市役所に勤めようけん、頼んでみるよ。女子
へおなご」はオイに任せとけ」と島田が広い
額の汗を拭きながら上機嫌だった。円城寺多
美子も同級生で、定年後は自宅で書道教室を
開き、自宅周辺の子供達に教えているそうだ
った。その後恒例の飲み会で各自が勝手に

喋りまくり夜更けてお開きとなった。
お盆を直前に薄曇の日があったので、山神
は思い出したように両親の墓参りに出かけた。
清水の滝行きのバスに乗った。子供の頃は歩
いて上ったものだと思った。窓景色の山裾を
高速道路が走り、そのインター付近に家々が
建て込んで風景は一変していた。バスは終点
まで乗った。清水の滝の姿と鯉料理屋の並ぶ
町の様子に違和感はなかった。ビールと鯉定
食の昼食をそそくさと済ますと、バス通りを
歩いて下った。墓場への入口に昔ながらの風
雪に目鼻も朽ちた野仏が、夏草の繁茂の中に
隠れるようにあった。ここから狭い山道を百
メートルも分け入れば、左手に山杉家の墓地
が見えるはずだった。山神は足を停めて目を
疑った。そこには丈高いヒマワリの花が咲き、
半面はトウモロコシの茂る畑と化していた。
幹の太い榎木も伐採されてしまったようだ。
丁度、麦藁帽を目深に被った農夫が畑の見回
りをしている風だった。ので、声を掛けてみた。

「すみません、山杉さんの墓はこの付近でし
たよね？」
「あந்த、誰ね？」と老人のしゃべれた声だ
った。
「いや、ただの昔の知り合いですよ」
「そぎゃんことですか。跡取りさんが、とう
の昔に本家の墓の遺骨だけ、埼玉の霊園に移
しんしゃったよ。他ん墓の遺骨や木の根元に
埋めてあった骨壺は、三間寺か、どつか知ら
んが無縁塚に納めたごたあよ。墓石は全部、
業者のトラックで、何処さいじゃ運んでしも
うたよ」とその人は、集落の人に特有のよそ
者に対する狷介な目付きで教えてくれた。三
間寺に限るなら、寺町で一つ一つ当たれば何
とか手掛かりはあるだろうが、市内や近郊の
寺を一軒一軒つぶしていく気力は失せた。自
分が生きているうちに、父母は心の中に生き
ている、と山神は諦観を持つしかなかった。
彼は、はなから山杉家がまだこの町に所在す
るかどうかも確かめなかつた自分の迂闊さを

呪うしかなかった。今、自分らが面白半分に探っている、まつやん堀端の車力の親父一家の消息と父母の運命も、さして相違ないようにな気がした。八帰り花山神勉が、八月の盆明けの日の昼下がりに図書館にいたら、いきなり内藤鉄夫が迎えに来た。北浦の江里口四郎って知つとうやろうと話を切り出された。中学校で一緒にクラスにいた子で、誘われてアケビ採りに連れて行つてもらった覚えもあった。内藤の話によると江里口は中卒で町を出て、福岡県・大川の家具職人になったが、三十前には町に戻って来て、大工になって暮らしているそうだ。根っから、北浦の人間で、近隣も一族ばかりだ。から、車力の親父の情報が取れると踏んだ、と言。訪問の段取りはしたから約束通り一緒に行く。と誘われた。四郎は山神も知って。いる遊び仲間だったし異存があるはずもない。

「あゝ、懐かし顔やね。勉強ちゃんか、日の暮るっまでオイと遊んで、親からくるわれたって、よう聞いたよ。あん頃が人生で一番楽しかったよ。もう髪も薄うなっで女遊びもようせんよ」と言う江里口四郎は小柄なうえに童顔で、昔日の名残が濃かった。「俺は、この歳になつて田舎に帰つて来て、浦島太郎のごと暮らしようよ。四郎ちゃんと再会して嬉しかよ。又昔のごと、遊びたかねえ」と山神は率直に懐かしさを表した。久闊を叙す二人の会話の合間をみて、内藤が割り込み本題を切り出した。「オイ達は電話で言うたごと、今、調べようこのあるとよ」と切り出した。昭和二四、五年頃、北浦の外れに住み、車力を引いて薪などの行商をしていた親父さんとその女房と娘の一家について何か消息を知らないか、と内藤が訊ねた。「オイ達はまだ五才くらいやろう。覚えとらんよ。向かいの本家の兄者が喜寿で十二歳も

上やけん、何か知ったうかも知れんね。呼んで来るよーと四郎は中座した。やがて、彼をコピーして腰を曲げさせた感じの長男の一郎と名乗る人を連れて来た。わしゃ、この在から出たらんけん、大概のことは知ったうよ。だいぶ以前ばってん、親父達が生きとった時に、色々聞きながら家系図ば作ったけんねーと家系図を前に昔話を始めた。江里口家の父方の祖父の弟、つまり大叔父が博多の呉服商の跡取りで北条家へ婿入りしたそうだった。江里口家の祖父熊雄は明治十五年の生まれ、北条家へ婿入りした弟の鹿雄は明治十九年の生まれだった。この江里口兄弟の父の亀吉は明治四二年の生まれで、昭和四八年に六四歳で物故していた。こぎゃん田舎から、なして博多んごたあ都会に婿さんに行つたところかーと弟の四郎が不思議そうな顔をした。そりゃあ、うちの祖母さんが牛津の出で、その姉さんの大伯母が佐賀ん街の呉服屋に嫁

入りしとんさった縁たい。そんな人が仲立ちして話ば進めたみたい。四郎の兄が父親から聞いた話では、大叔父の北条鹿雄が晩年は長男に家督を譲り、大分の亀川町に隠居したという。内藤は本件と何ら脈絡のなさそうな四郎の兄の話に辟易とした顔をしていた。それでも律義な山神はメモだけには熱心に取っていた。『あのう、四郎ちゃんのお兄さん、昭和二四、五年頃、この集落の下の外れに住んで車力ば引いて、町さい行商する親父さんを見かけなかつたですか？』と山神はすっかり気負い込んで方言交じりに訊いた。『そいぎい、オイが十七、八の頃か。思い出すけん、待ってくんしゃい。そん頃、土蔵に住んどった親父がおって確か車力で行商しよったよ。もう、ずっと以前に土蔵は取り壊されたよ。』と彼は頭を抱えて真剣に考え込んだ。『四郎！今、電話しとくけん、松尾の姉へあねーしゃんば、呼んで来てくれんね。あん頃、

野 荒らしちゅうか、畑の野菜ドロボ―の多て
ね、オイも真夜中に青年団の連中と見廻りば
したけんね。面白か話は全部、姉しゃんに話
して聞かせたよ。あん人は頭の良かけん、何
でん覚えとんしゃあよー
「飲み水は、どぎゃんしたとやろか？」と四
郎が呟いた。
「そんな空家の土蔵の傍に、釣瓶の古井戸のあ
ったけんね。そいば飲みよったとやろうねー
やがて、四郎が小柄な白頭のお婆さんを連
れて部屋に戻って来た。今年で八十になると
いう長女の春子さんは、この兄よりも豊饒と
して肌の血色も良く、年に似合わない澄んだ
声は茹だるような午後空気を和ませるよう
に艶っぽかった。中学生時代、勉は四郎の家
に何度遊びに来ていたが、この兄と姉につ
いては全く記憶がなかった。もつと年の近い
夏子というお姉さんがいて、モンペの野良着
と、いう定番の農作業姿ではなく、口紅でお化粧
粧した顔に普段着のスカ―トを穿いて野良仕

事をしていた姿を奇異に眺めた覚えはある。
それにしても、この江里口家は、男は一郎、
二郎、三郎と順番に名付け、女は、春子、夏
子と四季の順番にして、子沢山の名付けの面
倒臭さを免れていたようだ。
「この集落の下の方は、台風で北浦の堤防の
切れて、家の流されてしまったけど、昭和二
五年ちゆうたら、それ以前のことだね」と春
子さんは若干よそ行きの言葉を使った。山神
も小学校の下級生の時に、北浦の堤が大雨で
決壊し洪水が起きたことを思い出した。
「姉さん、オイが土蔵の住人の話ばしたよね。
どぎゃんことやったか、覚えとらんね？」
「よう覚えとうよ。野中の一軒家にあった土
蔵のことでしょ。あんた、もう耄碌へもうろ
くゝの始まったとね」と春子さんは弟の一郎
さんを冷やかして大笑いした。
「こん集落の下に家系の絶えた空家のあって、
幽霊の出るちゆうて、昼間でん子供は近づか
んよ。ただ、いつの間にか土蔵に人の住んど

って、気色の悪かばってん、夜中に見廻りば
したとよ。そん時の話くさ」と長兄の一郎さ
んが言った
「中年の夫婦者と中学校出た位の女の子が住
んでいたことね。あんたから聞いたのは、そ
の親父さんが、以前から土蔵にあった車力を
勝手に使って、町に薪なんかを売りに行つて
いると言つたこと、勝手に山に入つて薪を採
るのはドロボーだと言つたこと、それと土蔵
の周りを勝手に耕して野菜を植えていると言
つたことかな」と春子さんは頭の引き出しか
ら記憶を一つずつ取り出していった。
「うん、裏山さいキノコ採りに入つて、そん
母子にバツタリ出遭うたことのあつたよ。小
娘の方は陽に当たらんせいか真つ白か顔ばし
とり、親の方は髪の毛ば背中に垂らし、ほん
に吊り眼のえすかつたよへ怖かつたよ」と
長兄も姉につられるように記憶を呼び覚まし
ていった。「一郎さんが続けた話では、夜中に
青年団に交じつて土蔵を見廻つた時に、中か

「お父ちゃん、止めちよくれえ！」と虐待
とは又違う哀願するような裏返った女の声や
男の低い喘ぎ声や女の咽び泣きが聞こえ、皆
で顔を見合わせ、周辺の暗がりには散らばって
張り込み、しばらく様子を探ったそうだった。や
がて、懐中電灯を手に小娘だけが出て来たと言
う。その後はわたしが喋ろう。あんたから聞い
て良く覚えとるからね」と春子さんが話を継
いだ。一郎は団長と二人で小娘の後を尾行し、
他の者は田畑の見廻りを続けたそうだった。娘は
慣れた感じで夜中の町を裏道伝いにまっちゃん
掘端の道を通って公園山の先の神社脇の小屋
の戸の前で、母ちゃんと呼んで中に入ったとき
り、出て来なかったそうだった。それから、何は
ともあれ好奇心だけが募り、興味本位で青年
団が土蔵の様子を毎晩のよう監視する有様
となり、常時三人いるのではなく、親父さん
と小娘だけの時が多いことに気付いたそうだ。
青年団の連中は、夜中の小娘の声が悲痛な泣

き声から、日を追って淫靡な喘ぎ声となり、
事後は父娘の睦言に変化していった様子に、
夢中で聞き耳を立てていたそうだ。
「姉さんは、ほんによう覚えとうね。オイ達
はマムシのおるけん、ボロボロの地下足袋ば
履いて見廻りばしよったよ。もうビツキ
へ蛙も鳴かん、コオロギのせからしゅう
へうるさくも鳴く時季やったね。うん、思い
出したぞ！月夜の晩やった。もう死んだばっ
てん、オイよりか三つ上のほんに良んなか従
兄の満男しやんとわざわざ夜道ば歩いて、ま
つやん掘の先の神社ん横の小屋の戸ば叩いて、
『おい、父ちゃんとな娘がツグツとった
ぞ！』と喚へおらぶぎい、すぐ戸の開いて
出刃包丁ば手にした女の出て来たけん、もう
後ろも見んで、チンチロマイして、ちん逃げ
て来たよ」と四郎の兄さんが若い日の記憶の
一断片を呼び戻して語ってくれた。
「その後のことは、もう忘れたのかね」と春
子さんは又語りだした。翌日から土蔵に人

のいる気配がなくなつたそうだ。一郎達は例によつて見廻り中に、土蔵の脇の畑の菜っ葉に、
がきれいサツパリと刈り取られ、土が掘り返され、
た痕跡を見つけたそうである。不審に思つた団長から駐在に言い付けようかと相談も出たが、皆が面倒に巻き込まれたくないといふ結論で、申し合せて口を噤んだそうだった。う。それっき、土蔵の住人は行方をくらました。してしまつたそうである。
土を掘つた跡を調べてみなかったのです。か？山神は素朴な疑問を四郎の兄に訊いた。
「野菜畑の跡はよう見たばつてん、野菜の引つこ抜かれただけで、元んごと平になつとつたし、せからしかことは、もう良かという気分だつたよ。大体が、警察でん駐在でんが、ろくに飯も食えず、コッソイ闇米ばもらいに来んしやつた時代のことやけんね。まだ、アメちゃんに占領されとつたドサクサの時代に、警察に何ば訴えても、おのれの食ひ扶持に精一杯くさ。他人へひと様のことなんかかま

つてくれるもんかね」と四郎の兄は言い訳の
ように吐き棄てた。
北浦の里からの帰り道だった。
「おい、何じゃ花の狂ったごと咲いとうぞ」と内藤が車の前方を指差した。祇園川の流れの夏草の岸辺に、丈高い雑草の茎に蔓を巻きつけた一叢の青紫の花々が凜然と夏空の下に咲いていた。初夏に花開いたクレマチスの帰りに花だった。山神は自分にも、もう一花咲く日があるのだろうか、と考えながら黙っていた。
た。
九良夜
公園山や北島家の庭木の幹で暑苦しく鳴いていた蝉がツクツク法師と涼しげな鳴き声に替わった。九月一日、旧名で言えば長月、山神勉は改めて光陰の流れの早さに思いを致した。
た。夕刻、珍しく定刻前に、
「いつまでん暑かね」を合言葉のように、
メンバー全員が山神の離れに集った。
「今日は酌婦のおうけんね」と北島輝男が奥

さん。をそのまま留めた。
「酌婦なんて、あんたもカビの生えたごと古
臭か男ね。ホステスで言いんしゃい」と奥さ
んが金齒を見せて破顔した。彼女が全員のコ
ップにビールを注ぎ、北島の音頭で乾杯した。
「今日は、オイが先に喋るよ」と北島が機嫌
良く語り始めた。彼はこの町の料亭・旅館を
聞きまわったのだった。ほとんどが代替わり
していたが、女親は親類の家や老人ホームで
生存しており、直接面会はしてないが、車力
の行商夫の連れ合いで、飯炊き女や賄婦をし
ていたという女とその娘の情報を、それぞれ
の子息達を介して仕入れていた。
「車力の親父の女房は、町の宿屋とか料亭の
下働きば掛け持ちで、ほんに朝から晩まで飯
炊き、掃除、洗濯、風呂焚きの働きづめで稼
ぎよんさったそうだ。目尻の吊りあがつて薄
気味の悪かけん、親しゅうする仕事仲間はお
らんかったそうだ。始めのうちには、北浦の下
んにきから通いよった。ばってん、帰り道の遠

かけん、そのうち公園山の神社の横の空き小
屋に住み込んで通っていたという話やったね。
最初は緋へかすりゝモンペのボロ着やっただ
っでん、だんだん金の貯まると一寸ましな服
になったて言うよー
「名前に分かったこう？」島田が、もう赤ら
顔になっっていた。
「一応、雇い人やけん、素性ば聞かれたとや
ろう。横町のA閣に記録のあったよ。江里口
房子三五歳と名乗っていたね。一家で別府か
ら来たと聞いたのは恵比寿町のB館の当時の
女将さんだよ。それから、北小路のC亭にや、
よう娘さんと最後のもらい湯に来んしやった
そうだよ。」
「娘の名前は何ねーと又島田が口を挟んだ。
「うん、さっきのA閣には、娘が親父の方と
最後のもらい湯に来たそうで、当時の女将さ
んの記憶では、娘の名前はユリコだったごた
あて言うたよ。年は十五、六じゃなかろうか
ねって言うたよ。そいから、もういつちよ、

面白か話ば聞いたよ。B館では、房子は自分も人相とか手相ば診るばってん、娘のユリコの前世占いは、よう当たるけん、お客さんに紹介してくんしゃいって、先代の女将さんに頼んどったよー

北島輝男は長話になった。酔って上機嫌になった分限者のお客の余興に、宿の女将が占いを勧めたら、結構乗ってくる者もいたそうだ。

そんな時、ユリコは白粉で化粧し白無垢の着物に着替えて客の前に出た。先ず客に姓名と誕生日を尋ね、その干支を語ると手相や人相を観察しながら、貴方は幕末の志士の何某の生れ変り、と実しやかに託宣するので、興に乗った客は当時では破格の大枚百円札を握らせたという。房子は一年半位、旅館・料亭の下働きをしていたが、終いに精神を病んでいたようにで、

吊り上った白目を引ん剥いて、ブツブツ独り言を言うから、周りの者が気味悪がって出入禁止にしたと言う。

「オイにも喋らせろ！」と島田太郎が北島の
長口舌に堪らず割り込んだ。
「オイは多美子に、戦後こん町に転入したも
んの記録ば調べたかけん、せがれに話ば通し
てくれんかって、頭ば低うして頼んだとやぞ。
アイツは小へこゝまあ頃から気の強うて好
かん！意地も人一倍悪うてな、よう原っぱで
女の子同士相撲ば取って、負くつごとなあぎ、
相手の服ば裂破へきしゃゝぶるごと掴んで引
っ張り回したいい、引っ掻きたいして泣かせよ
ったけんね。何ちゆうたと思うか？あんた、
何ば寝ぼけようとね。そぎゃん大昔に町に来
た人ば探すごと、役所は暇じゃなか！面白半
分で、そぎゃんふうけたへたわけたゝことば
いう人は、馬の小便で面へつらゝでも洗うて
出直して来んしゃいつて、えらい剣幕でくる
われたよ」と島田が照れ隠しのように薄い頭
髪を掻いたら、北島の奥さんが先ず吹き出し、
続いて皆が腹を抱え涙こぼして転げまわった。
一同がようやく静まり返った頃、内藤鉄夫が

口を開いた。
「オイも山神ば連れて、北浦の江里口のところへ出かけ、四郎の兄さんと姉さんから良か話ば聞いて来たよ。あの集落の下のか空き土蔵の住人と、そいと神社ん横の小屋の関係が分かったよ。山神、お前から掻い摘んで説明してくれんか」と彼は山神に話を振った。
山神勉は、江里口四郎の兄が、少年時代に青年団の野荒らし防止パトロール中の体験で知った土蔵の中の出来事や娘の神社脇の小屋までの夜間徘徊の様子など、耳にしたこと全てを披露した。山神が話し終わっても、皆、頭の中で情報の整理がつかないようで、それぞれ飲みかけの酒盃を黙々と口に持っていていく有様で、その場は暫時しんと静まった。
「まだ話のゴチャゴチャしとぅばってん、だ、いぶ狭まった気もするよ。車力の親父一家は、大分県の別府市からオイ達の町に来たとよ。祇園川の上の空家の土蔵に勝手に住み込み、そのうち女房は仕事の都合で、公園山の下の

神社の横の花見小屋に勝手に入り込み、夜中に娘が行ったり来たりしとったとよ。女房が江里口房子と名乗ったのなら、隠居して亀川町におったちゅう四郎ちゃんの大叔父の北条鹿雄がキーマンだよ。「や」と静寂を破るように、内藤がまとめた。

「何で急に『別府』と『北条』が出て来たとね？」と山神が腑に落ちない顔をした。

「そりゃあ、元刑事の勘くさ。別府駅の先に亀川駅のあって、亀川温泉ちゅう町のあったとに気が付いたよ。大分と別府と亀川町が結びついたりたいたいね」と内藤は得意満面だった。

「何だ、亀川って、別府の温泉町の一つだったのか」と山神は納得した。

「車力の親父達が何でこの町に来たかは、別府に隠居しとった北浦の出の北条鹿雄の何番目かの息子やけんが、父親の生地やったこの町のことば聞いとったとやろね」と中島豊一が念を押すと、内藤はご明察とうなずいた。

「そいぎんたあ、親父が我が娘の体で遊びよ

ううちに、娘も男の味ば覚えてしもうて、女
房が狂ってしもうて、何じゃ、仕出かしたち
ゆうことだな」と島田が卑猥な笑い声をあげ
たら、北島の奥さんが、ちよつと顔を顰め、
手洗いに行ってくると中座をした。
「内藤、どぎゃん具合に始末ばつけるとね。
捜査方針ば示さんね」と北島が催促した。内
藤鉄夫はフウツと溜息をつくとき口を開いた。
「ご本尊の親父のフルネームも判明しとらん
し、こいから先は役所の出番かね。老人ホー
ムのお袋さんの話じゃ、車力の親父一家は土
地におられんごたあ、何か不始末ば仕出かし
てこの町さい来とるけん、女房は本名ば憚
へはばか」って、義理の父の旧姓の『江里
口』ば名乗った気がするんだ」
「さすが、元刑事の推理だね。すると、親父
の名は北条何某で、妻は北条房子だ」と北島
が手を叩いて赤ら顔を喜色満面にした。
「うん、その不始末ば明らかにせんといかん
だろ。オイが警察学校の同期生に偉うなっ

たとのおるけん、そいば通して大分県警の古
か資料ば何とか調べてもらうよ。警察大学の
知り合いが大分県警のOBにもおるやろうけ
んね。ここんどこは、オイに任せんねーと内
藤は何かが吹っ切れて、胸を叩くような自信
を示した。
「オイは一家全員の消息が、昭和二五年の秋
からプツツイ途切れとうとが気になるな。道
路使用許可の関係で警察の交通係によう顔ば
出すけん、署長さんも知っとうよ。一応、そ
ん頃の記録に何かあるか聞いてみるよ」と北
島が提案したら、内藤はウン、ウンとうなず
いた。残った酒とオカズを平らげて酒盛りは
お開きとなった。中島も島田も内藤もメル
で家人に車を北島家の玄関先に呼び寄せてい
た。つくづく便利な時代というか、家族には
傍迷惑な時代になっっている、と山神は内心苦
笑しながら見送った。
夜気が冷んやりと頬を撫でた。半輪の月が
民家の屋根の低みに宿って、山神の影を細々

と照らししていた。段々と新月に向かうが、二
十日過ぎには仲秋の名月になるだろう。その
頃は十五夜の良夜になっっているに違い、
と山神は漠然と考え戸外にしばらく佇んでい
た。
十秋冷
十月朔日へついたりになった。このところ、
ろ、山神の図書館通いの頻度はめっきり減り、
部屋でゴロゴロ寝っ転がって雑誌をめくり怠
惰に過ごしていた。秋の彼岸を過ぎたら、さ
すがの夏の炎帝も退散していた。
「山ちゃん、お早う！」
山神が洗面を終えた足で屋敷の玄関先に出
て、ぼんやり天山の紺碧の朝空を仰いでいた
ら、もう作業衣に着替えて仕事に向かう北島
がダンプル機の運転台から声をかけてきた。
多久の山の中まで残土処理の作業で向かうの
で、早めに出るそう、荷台の『北島組』の
塗装も剥げかかったトラックは、マフラ―か
ら青い煙を吐いて発進した。山神もこの半年

間を無為に暮らし、何か身体を動かす算段を
する時期になった、と自覚せざるを得なかつた。
た。彼は久しぶりに自転車で町の南の郊外へ
出てみた。遙かに天山山脈を仰ぐ旧三里村
へみさとむらゝの一面の田んぼで、黄金色の
稲穂が秋風に揺れていた。ふと見ると、何の
由緒か畦に行儀良く野仏がふたつ並んでいた。
彼はもう墓もない父母をひとりで思い出し
た。おのれの来し方はこれで良かったのか、
行方もこれで良いのか、と不意に感傷的な気
分に陥り、その場に膝を折り合掌して自分を
慰めた。夕刻になり、
「もう朝晩は冷やかかねえ」を合言葉のよう
に、
老年探偵団のメンバーが集まって来た。島田
太郎は、自分の働きが一番少なくて悪かつた
と言つて、清酒一本と団子（ダゴ）汁を鍋ご
と運び込み、車を運転させて来た奥さんに、
「お前も少し食つて行け」と誘つたが、彼女
は日焼けした顔に笑みを浮かべただけで、お
愛想に手を振ると部屋から出て行つた。北島

の奥さんは、すっかり話に興味を抱いたように、今夜も御相伴するという。中島豊一は、正直に夏の売れ残りが出た、と言って水羊羹を箱ごと差し出し、根っからの甘党は奥さんだけだから、余りは必ず持って帰るよう彼女に言いつけた。内藤鉄夫は、頼み事が叶った祝いだと言って、高級ブランドのカミユを披露した。いつものようにテーブル上が酒と菜へさかなで所狭しとなった。――今日が捜査会議の最終回になると思うよ」と北島の乾杯の音頭の直後に、内藤が口を開いた。彼は長崎県警本部の部長まで出世した同期生のコネを使い、大分県警資料室の古い捜査記録を洗ってもらっていた。――やっぱい、持つべき者は友達だな。オイ達が生きてでん出来んことば、してみせるけんね」と彼は天にも昇るような機嫌の良顔をした。車力の親父には前科があった。旅館の枕探しの常習犯としての送致書類が見つかったそうだった。別府で少ない北条という

苗字が伝手となつて偶々炙り出された昭和二年の犯罪記録だつた。親父の本名は北条勝信と言ひ、前に話ばした北浦出身で博多の呉服屋の入り婿になんさつた北条鹿雄の三男坊よ。明治四四年生まれちゆうけん、当時は四十男やつたとよ。三男やけん店の跡取りにもならんし、とにかく陸軍に入へひやあゝつて軍属の土木用員で国内の軍隊の駐屯地ば転々とし、富山で終戦ば迎えたとよ。結婚も軍属の時にしとつたよ」

「嫁さんはどぎゃんして見つけたとか？」と島田は女のことになると目が光つた。

「房子ちゆう名前です性ははつきりせんばつてん、千葉の連隊におつた時に飲み食いした食堂の下働きの女と懇へねんごろになり、生まれたとが娘の百合子たいね。昭和九年のことやけん、こん町に来た時にや、娘は十五、六歳になつとよ。とにかく籍ば入れて博多の実家に住ませ、本人は単身で軍の駐屯地ばあつちこつちへウロウロしとつたとよ」

「別府に住むようになった切っ掛けは何ね」と
山神も次第に話が見えて、返って焦ったよう
に口を挟んだ。
「ちよっと待たんね。順序立てて説明すっけ
ん、良かやんね？」と言つて、彼は缶ビール
を口に喉を鳴らし、静かな口調で語りを続け
た。終戦後、復員した北条勝信は別府の亀川
温泉に隠居していた父の鹿雄に呼ばれ、妻子
を連れて身を寄せることになった。鹿雄は、
戦時中に女房に先立たれて一人身の侘び住ま
いだったから、三男一家を呼び寄せたのだろ
う。博多の呉服屋のご隠居として、別府でも
なかなかの名士になっていた鹿雄のコネで、
勝信は進駐軍の基地に出入し、米軍の残飯を
もらつては近所の旅館に横流しのように売り
捌いていた。何しろ、食料事情が困窮し国民
が飢餓状態にあつた時代だった。妻の房子は
旅館の女中、飯炊き、洗濯、清掃から客の求
めに応じては、お灸でも按摩さんの真似事で
も占いで何も何でもやって稼いでいたという。

房子は生来の癩癩持ちで、その分だけ勘も鋭く、面白半分にやった占いが結構当たって評判になり、後には家の玄関に占い師の看板を出したほどの腕前になった。狐みたいな吊り眼の顔付も占い師の風貌に似合っていた。母親似の娘も占いに興味を抱き、母親が何処から買った占いの書籍に目を通していた。この北条一家に突如不幸が訪れたのだった。勝信の父の鹿雄が昭和二三年に持病の心臓発作で急死してからだという。父の後ろ盾をなくし、進駐軍出入も別人にとって替わられ、勝信は役得を失い旅館の下男みたいな下働きに甘んじるしかなかった、という。一父親が金持ちで、遺産で家屋敷ももらえたと感じるようにな、と中島が沢山持参した責任を感ずるように、三つ目の水羊羹をしきりにサジでしゃくって口に運びながら不審そうに訊いた。

「家でん土地でん、博多の長男名義になつとつて、あぎゃん戦後のドサクサの時期に、兄

貴が黙って一財産ばくるっはずのなかろうよ。
勝信も親からかなりの大金をもろうとったば
ってん、何しろ一銭一厘ちゅう明治以来の銭
の単位の通貨の円が、終戦後すぐに流通ば止
められ、物資不足と新円切替でハイパーイン
フレになったやろう。そいけん、息子の勝信
が折角もろうた結構な大金の価値も二束三文
になっただしもうたよーと言う内藤の声が少
し嘎れて来た。北島の奥さんが気を利かせて
カミユの水割りを作って内藤に手渡した。内
藤は奥さんに会釈するとグイッと呷り又語り
だした。
「世間様一般より楽な暮らしばしよったとや
けん、勝信の落胆は激しかったと思うし、女
房も暮らしが面白うのうなっただと思ふよ。終
戦直後の温泉湯治客なんて、ほんの一部の富
裕層の者だけやっけん、勝信はそけえ目星ば
つけたとよ。下働きの旅館ば手始めに亀川の
温泉宿の部屋の枕探しちゅう手口のドロボー
稼業に手ば染めて、仕舞いにゃ客に見つかっ

て警察に突き出されたみたいね。女房の房子
も房子で、亭主のドロボー品ばわざと隠して、
失せ物の占いで初めてそいが見つかったごと
偽の託宣ばし、占い料ば稼ぎよったとよ。部
屋の掛軸ば盗られた宿屋の女将さんが、一応、
房子に占いばさせたぎい、近くの神社のお堂
の床下から出て来たとよ。ばってん、話の出
来過ぎとってどうも怪しか、とその女将さん
が文句ば言いに来んしやった。あんたの占い
は一人芝居で偽もののじやなかね、と詰め寄ら
れ口喧嘩になり、とうとう持ち前の癪癪玉ば
破裂させて、目ん前の練炭火鉢ば引っ繰ん返
して火事騒動ば起こしたってよ。そいが亭主
がムシヨでお勤めしように時のことやけんね。
女房の方は何じやかんじや言い逃れして事件
にはならんかったばってん、亭主の勝信がム
シヨから出てきたら、家は半焼でドロボーと
偽占いの詐欺師の一家じや、もう世間の悪
うて別府には住めんごとなったとよ。ここま
でが同期のお偉いさんから調べてもろうた内

容たい。後はオイが推理するしかなかなやろう。
多分、北条勝信ちゆう男は、妻子ば連れて死
んだ父親から聞いたとった郷里の旧岩松村の北
浦に闇雲に来てみたばってん、誰へだいも
知ったとう者はおらんけん、集落の外れの空家
の土蔵ば見つけて勝手に住み込んでたつたとや
なかうかねーここまで喋った内藤は一息入
れて缶ビールを口にした。
「オイは警察で聞いて来たよーと蛸（タコ）
が茹であがったような北島が、話の終わるの
を待っていたかのうに口を開いた。
「はつきり教えてくれんばってん、昭和二五
年の十月の中頃、駅に近か踏切で朝方に石炭
の貨物列車に飛び込み自殺のあったてよ。髪
の長か着物姿の三十から四十の身元不明の女
の轢死体で、町役場に埋葬するごと手続きば
した記録の残ったうて言うたよ。何か関係あ
ると思うやろーと坊主頭の額や頬を増々赤
くした。
「オイにや、途切れ途切れで、今いっちよ

へ今ひとつ話のよう分からん」と島田はダ
ゴ汁を啜りながら上目遣いに内藤を睨んだ。
「山神！お前が事務担当やけん、ちよつと全
体ばまためてくれんか」と内藤はカミユを舐
めながら、少し呂律の怪しくなった舌で島田
の申し出を山神に振った。山神勉強は、これま
での皆の発言を、自分の役割として克明にメ
モ帳に記録していたので、た易い御用とばかり
りに、顔色一つ変えずに間髪を置かず喋り始
めた。
「ええと、俺の推測も交ぜて概要を言うよ。
捜査の発端は、まつやん掘端に車力の親父が
倒れるように寝ていたこと、真夜中の掘端に
真つ白い顔の女のいたこと、それと真夜中に
掘端の道を、髪を振り乱した女が走って行っ
たという怪談だよね。それで各方面から調べ
たら、明治時代に北浦から博多の呉服屋の婿
養子になった旧姓江里口の北条鹿雄の三男の
北条勝信が、軍隊の土木作業員で全国の駐屯
地を回るうちに千葉で食堂の女の房子と祝言

をして娘の百合子が生まれた。ずっと戦争中のこととて妻は博多の実家に預けていた。ここまででは良いね」と山神が念を押したら、皆黙ってうなずいた。

「終戦後、この一家は別府の亀川温泉に隠居していた父の鹿雄の家に身を寄せて進駐軍に出入して何とか暮らしていたが、父の死去と戦後のハイパーインフレで暮らし向きが一変し、勝信は宿屋荒らしのドロボー稼業と成り果て、占い師の房子も悪乗りして、亭主が盗んだ品物をだしに、自作自演の失せ物捜し占いのお告げをして、それがバレて宿屋の女将に詰られ、カッとなり練炭火鉢を引っ繰り返す火事騒ぎを起こし、一家は別府に住めなくなってしまう、話に聞いていた父の郷里のこの町に逃亡者のようにやって来た」

山神が缶ビールを飲んで一息入れたが、皆黙りこくっていた。

「一家は父の生まれた里の外れに空家を見つけて、その土蔵を住み家とした。勝信は山で

働 き 疲 れ で ノ イ ロ ― ゼ 気 味 だ っ た 房 子 は 、 生
屋 に い る 母 親 に 態 々 へ わ ざ わ ざ 〽 知 ら せ た 。

青 年 団 が 父 娘 相 姦 に 気 が 付 き 、 面 白 が っ て 小
い 間 に 男 の 体 の 味 を 覚 え た 。

い っ か 見 廻 り の
体 を 犯 し 出 し た 。

最 初 は 嫌 が っ た 娘 も 知 ら な
た ら 、 父 親 は 牡 の 欲 望 を 堪 え 切 れ ず に 娘 の 肉
や が て 、 夫 婦 で 小 銭 を 貯 め て 暮 ら し が 安 定 し
で 休 憩 し て い る 房 子 を 訪 ね 夫 婦 の 営 み も し た 。

暮 ら し て い た 。

勝 信 は 、 行 商 の 途 中 に 、 小 屋
て 父 の 土 蔵 と 母 の 小 屋 を 行 っ た り 来 た り し て
百 合 子 は 、 夜 中 に 裏 道 を ま つ や ん 堀 端 を 通 っ
普 段 は 空 い て い る 花 見 小 屋 に 勝 手 に 住 み 込 み 、
房 子 は 朝 か ら 晩 ま で 働 き づ め の た め 、 町 中 の
も 旅 館 の 客 の 前 世 占 い で 小 遣 い 稼 ぎ も し た 。

や が て 、 一 家 が 町 に 馴 染 ん だ ら 、 娘 の 百 合 子
端 に 車 力 を 休 め て 昼 寝 を す る こ と も あ っ た 。

活 し て い た 。

仕 事 に 疲 れ た 勝 信 は ま つ や ん 堀
房 子 は 旅 館 や 料 亭 の 下 働 き で 小 銭 を 稼 い で 生
の 塩 漬 け を 捨 て 置 か れ の 車 力 で 行 商 し て 回 り 、
拾 っ た 焚 き 木 の 枝 や 、 畑 荒 ら し で 盗 ん だ 野 菜

来の癰癤玉を破裂させ、包丁を持って夜中の、
まつやん堀端の道を通って土蔵まで突っ走り、
快樂に溺れて熟睡中の亭主と我が娘を、狂気の
の赴くままに切ったり刺したりして殺してし
まった。そして畑を耕すためにあったスコッ
プや鍬を振るって土蔵の脇の野菜畑に大きな
穴を掘り、二人の亡骸を土に埋めて隠した。
夜が明けたら町に出て、貨物列車に覚悟の飛
び込み自殺をした。これでどうかね」と山神
は初めてちよつと顔を斜に構え、得意気な表
情をした。
「よう出来たよ。伝聞証拠ばつかしで信憑性
の無かばってん、もう六十年も経つとうけん
ね。そぎやんところが、この怪談話の真相と
思うよ」と内藤が皆の顔を見渡した。
「オイ達が四、五歳の頃の話やけん、こいで
捜査は百点満点くさ。もう親父の車力でん何
でんが、あん後の水害で流されっしもうとろ
うけんな」と島田が欠けた前歯を剥き出しに
して笑った。

「そいぎい、やっぱいホシはおったとやんね。
北条房子が夫の勝信と長女の百合子ば殺した
殺人事件やんね。警察は何ばしよったとやろ
か。土蔵の中も血だらけだったやろ？」
中島が例の蒼ざめた顔になっていた。
「もう良かやんね。今と時代の違うとよ」と
北島が言った。
「そぎゃんくさ。オイ達は親の苦労ば、なあ
も知らんで育つとうとぞ！今のうの時点の定
規と杓子で、アメちゃんに占領されとった頃
の日本の世相ば測るふうけもん（愚か者）の
おうか！」と島田がやや興奮した口調だった。
山神も平和ボケして暮らした自分の半生を顧
みて、現在の価値観で過去の時代のことを弾
劾しても何も始まらないと思っただ。
「まつやん掘の白装束の女とか真っ白か顔の
若か女はどぎゃんすつとね」と中島は尚も不
服そうに食い下がった。
「房子は疲れて寝とって、白か割烹着姿やっ
たろ。百合子は、夜中しか町ば歩へさ」

るかんけん、陽に当たらんで雪のごと真っ白
か肌ばしとったとよ。と内藤が噛んで含める
ように解説した。が、中島は執拗に言った。
「そいぎい、明日にでんが、土蔵のあったに
きの泥ば掘り起こしてみんかね。親父と娘の
白骨の出て来っかも知れんたい」
「実は、オイは前もって内藤から今の話ば聞
いとったとよ」と北島が告白して続けた。
「こんな話ば聞いてピンと感じた。とよ。この北
浦の下土地の地均しば請負うた覚えのあつ
たけん、事務所の帳簿ば調べた。ぎい、間違
のう、そんな時の残土ば、まつやん掘端に駐車
場ば造る時の埋立てに使うとったよ。土はシ
ヨベルカ―でガバツと掴み、ダンブカ―で運
んでドバツとうっ棄てとうたいね」
「アチャア！もう現へげん」の証拠は何んも
なかとか！煙のごたあとばっかし」
「と云つて島田太郎が薄い髪を叩いて反つくり返り、
豪快に大きな屁を飛ばした。
時季は十月半ばとなっていた。雲一つない

秋 晴 れ の 日 曜 日 だ っ た 。 山 神 が 散 歩 に 出 た ま
つ や ん 掘 の 道 端 の 草 叢 も 公 園 山 の 桜 も 楓 も 雑
木 も 褪 色 し 秋 は 深 ま っ て い た 。 彼 は 赤 ト ン ボ
が 一 匹 、 忘 れ 物 で も 探 す み た い に 青 い 水 面 の
上 を 右 往 左 往 し 飛 ぶ の を 一 人 見 つ め て い た 。
『 キ ャ ア ツ ブ ロ の 頭 に 火 ん ち い た 』 と 山 神 勉
は 心 で 叫 ん だ 。 人 間 も か い つ ぶ り の よ う に プ
ル ツ と 潜 っ て ヒ ヨ コ ツ と 浮 い た 所 で 明 け 暮 れ
す れ ば 良 い の だ 。 妻 は 死 ん で 里 に 帰 り 、 静 岡
の 実 家 の 墓 に 岳 父 ら と 一 緒 に 眠 っ て い る 。 自
分 も 北 島 家 の 墓 域 の 片 隅 に で も 葬 っ て も ら お
う か と 思 っ た 。 傍 の 小 学 校 で 運 動 会 の 甲 高 い
歓 声 が 起 こ り 、 拡 声 機 か ら 流 れ る 行 進 曲 の メ
ロ デ ィ が 紺 青 の 空 の 深 み に 吸 い 込 ま れ て い っ
た 。

終